

## 高鷲の地名（3）

### 高鷲村の伝承と地名（2）

（1998 年発行の「郡上遊悠会」11 号に載っている上村彰隆氏の文章の再掲、121 号続き）

「向鷲見」・・・岩高村と称していたこの地を鷲狩り伝説により迎鷲見と呼ぶようになった。しかし正保郷帳によれば陰地鷲見村と記載されている。正式に向鷲見村と称されたのは、鷲見郷 8ヶ村の行政区画が定められた江戸時代中期より明治 8 年までである。

「大鷲」・・・明治 30 年長良川沿いの正ヶ洞村、中切村、穴洞村、向鷲見村が合併して出来た村名。

「恵比寿峠」・・・向鷲見岩高より白川街道を辿っていくと最初の山越えが恵比寿峠である。この峠の名の由来は、鷲狩り伝説に登場する武蔵権守頼保が鷲狩りを果たし 2 羽の小鷲を持参して京へ上る途中この峠にさしかかった。里も近くなつたため、飼餌などの家来が背負っていたものを投げ捨てさせたところから、餌捨て峠、それが恵比寿峠になった。

「千駄ヶ歩岐」・・・一駄が馬に背負わせる荷物の単位を示し、それが一日頻繁に通う難所とすることから千駄ヶ歩岐と言うようになった。

「ソヨギ」・・・会報 121 号「オヨギ」参照

「更気ヶ池」・・・木地師の娘「おとめ」と越前の行商「更気清右衛門」との悲恋を伝える。この更気ヶ池と白鳥町の境の村間ヶ池の説話には、池の主が白鳥になって飛来したという話が残っている。

「鮎走」・・・鮎走村というのは江戸期から明治 8 年までの村名で、同年切立村と合併して鮎立村となったもので、現在は鮎立と呼んでいる。地名の由来は、人皇 24 代顕宗天皇の時代の 2 年、宮人流罪として連人(ムジ)という者が、宿屋(シユクオ)を岩穴に結び始めてそこに住みついた。その子孫が山を開き畑を作り暮らしていたが、都から遠い山の中、税を納めることができなかった。そんな時、人皇 37 代孝徳天皇の時代に大雨が降り、鮎が庭の池にまで泳ぎ遊ぶのを生け捕り、それを天皇に献上した。走鮎を税としたことから、鮎走という地名がおこった。

「目赤栃」・・・栃は昔から留め木(とめき)と言って、どのような理由があっても伐採してはならない掟のもとに大切に保護されてきた。その実は食糧としての価値が高いためである。その若芽が、ここの栃はよそのに比べて赤かったことから目赤栃と呼ばれ、それが地名にまでなった。

「砥坂」・・・下地下に砥石、陶土を埋蔵し昭和 20 年代まで採掘していた場所がある。この場所を砥坂と呼ばれている。

「堂ヶ洞」・・・砥坂を登り切ると毘沙門岳が西に見え、北には大日ヶ岳山麓が迫っている。山裾を下りるあたりに鮎走の白山神社の社叢が見える。このあたりを堂ヶ洞という。

「塩屋」・・・堂ヶ洞を少し登ったところを塩屋という。ここは塩釜明神の社塔のあったところで、昔、貴重な品である塩の安定供給を祈願した。

「大洞」・・・堂ヶ洞一帯を大洞という。

「小洞」・・・鮎走由緒書に「・・・時に人類最早殖せる中に数百年を経て平家の後孫に庄司という者、紀伊の国より隠浪して鮎走村(小洞)に住む。また丹後の国より浪人が移り住人となる。後にその子孫、三郎、角次郎、政八、政七これを小洞の開拓の祖なり。前の平家の後胤、紀伊の国より来る者沼を干し榎畑(かやた)を開き田を掘ること励みて・・・」と記されている。平家ゆかりの者が定住したという記録は、高鷲村では小洞がはじめてである。ここの地形は、大日ヶ岳山麓の尾根が峡の東西流れる本流まで連なり、中央部を流れる小洞川の下流域は急に山が狭くなり、全く隔絶しており隠棲するには極めて格好な山峡であった。昭和初期までは、村内それぞれの集落は同村でありながらも相互の交流は余り見られず、婚姻圏も在所内に限られていた。そのため集落毎に何か異色の文化、習慣を持ち、孤立的な志向が何かと表に現れている。特に言語において、それが著しく見られた

